

霊光院と南朝忠臣戦死瘞骨之所碑

鳴川越の道を登ると旧春日神社の手前北側に霊光院があります。院は昭和12年以降整備された真言宗の寺院です。

境内にある高い石壇上に「南朝忠臣戦死瘞骨之所」と刻んだ大きな碑が建っています。明治21年(1888)にこの地を掘ったところ多数の人骨や武具が出土したことから、南北朝時代の四条縄手合戦の時のものと考えられ建立されたものです。

地藏谷川と分水樋

鳴川峠から流れ落ちる地藏谷川には、江戸時代より谷水を利用した水車が並んでいました。この谷筋の水車は綿実油絞りを主として行っていました。

旧春日神社から西へ150mのところでは川は2つに分かれ、四条と六万寺へと流れます。ここに江戸時代から両村に等分に水を分けるための分水樋が残っており、石室の分水とよばれています。



分水樋

旧春日神社

鳴川峠へ通じる道に面したところにあります。元は四条集落の東はずれの字宮ノ前にありました。祭神は天児屋根命で、古文書には建仁2年(1202)に勧請とあります。

明治5年(1872)に枚岡神社へ合祀されたため、社殿その他は現在地に移されました。

本殿は一間社春日造り檜皮葺、極彩色を施したもので、棟木には「天文九庚子年(1540)月日」と墨書が残っていますが、後年修理されて江戸時代初期の手法もみとめられます。昭和49年に市の文化財に指定されています。

境内の石燈籠は嘉永5年(1852)、狛犬は文化11年(1814)の銘があり、共に旧社地から移されたものです。

往生院六万寺

六万寺の地には、地名の発祥となった六万寺という古い大寺院がありました。寺は聖武天皇の代の天平17年(745)に僧行基が開いた畿内49院の一つで、大伽藍を構えていましたが、正平3年(1348)の四条縄手の戦いで焼失したといわれています。往生院はその一坊と考えられています。



旧春日神社

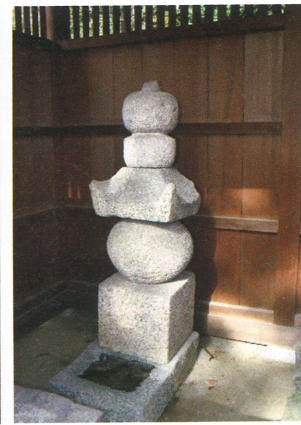


本殿

往生院は「捨遺往生伝」にのせられているように、高安郡の川瀬氏を檀越として、長暦年間(1037~1040)に極楽往生を願う浄土の信仰の場として建立されました。現往生院の北方には、金堂跡ともいわれる堂の礎石を配した基壇が残っており、「河内往生院伝承地」として府の文化財に指定されています。この場所は極楽の東門につながるという四天王寺西門から真東の位置にあるとされています。



木造阿弥陀如来坐像



正行の墓

中世後半には荒廃していましたが、江戸時代の初めの元和年間(1615~1624)に鷹司関白信房という人が檀越となって、僧欣誉浄泉が承応2年(1653)に本堂を再興しました。

本尊の木造阿弥陀如来坐像および両脇侍像、木造十一面観音立像がまつられ、藤原時代のすぐれた作として府の文化財に指定され、古墳時代の眉底付甕も府の文化財、境内の楠木正行墓が市の文化財にそれぞれ指定されています。

また、収集された民具を収めた往生院民具供養館は、事前に申し込みがあれば一般にも公開されています。

岩滝山遺跡

六万寺町の集落の東方、往生院周辺で発見された弥生時代後期から鎌倉時代の複合遺跡です。昭和43年のこうぎり自動車道の建設工事によって発見されました。標高約80m~100mの高所に弥生時代後期初頭から末にかけての約200年間継続して高地性集落が営まれています。南北約200m、東西約100mの範囲から市内の集落跡では最も多い12棟の竪穴住居が発見されており、平面形が円形から方形ないし隅丸方形の住居に時代が下がるに従い変化したことが確認されました。住居跡からは弥生土器や紡錘車・砥石などが出土しています。山畑遺跡の集落が廃



眉底付甕



弥生時代後期の竪穴住居跡